

# 「並列助詞」トと「格助詞」トについて

近 藤 研 至

## 0 はじめに

従来(1)に現れるトは「並列助詞」とされ、(2)に現れるトは「格助詞」とされ、二つのトは「違う助詞」として記述されてきた。

(1) ひろみとみなみが結婚する。

(2) ひろみがみなみと結婚する。

しかしそうした区別は、実は、それぞれの名詞句の文中での機能の異なりが、すなわち、その助詞の異なりであると記述される傾向にあると言っても過言ではないだろう。それぞれの名詞句が「並列」であるか「格」であるかという判断が先にあり、トの記述はそれを受けてからなされることが多いのである。その名詞句が「並列」要素と判断された場合は、トは「並列助詞」と名付けられるカテゴリーの中で、ややモなどとの異なりを中心として記述されてきた。また、その名詞句が「格」要素であると判断された場合は、その格は「あい方格」と記述され<sup>1</sup>、トは「格助詞」とされてきた。

しかし、こうした接近法では、

(3) ひろみがみなみと親しい。

に現れるトは、その記述の網にかかってこない。このトは、新しく「もう一つのト」として記述しなければならないのだろうか。

従来、こうした現象についての記述は純粹に統語的になされているとは言い難く、他の要因が混在したままなされていると思われる。小論では、文における「名詞句+ト」で導入される要素の統語的な特徴を記述し、その要素の導入にトがどう貢献するのかについて記述するものである。

## 1 「並列」とトについて

「並列」について、寺村(1991)は、「二つあるいはそれ以上の名詞、形容詞、動詞、(名詞+) 判定詞を、平等の資格で結びつけて、全体としてその文中の一つの構成要素とするのが並列的結合である」と述べている<sup>2</sup>。寺村は、

(4)a 光太郎と智恵子が結婚した。

b 光太郎が智恵子と結婚した。

c 智恵子が光太郎と結婚した。

の三つについて、「どれも客観的にみれば同じ出来事」とした上で、aは「両人が主役」で、bは「光太郎が主役」で、cは「智恵子が主役」と区別している。また、「光太郎」と「智恵子」という名詞句は、aでは「同じ資格で述語と結びついている」が、bとc

では「違った資格で述語と結びついている」と説明している。格助詞ガの位置や文型が、「主役」の決定と、「同じ資格」かどうかの決定に貢献しているという主張であろう。しかし、格助詞ガの位置や文型を根拠とすると、次のような例の扱いに困ってしまう。

(5)a 光太郎と智恵子が結婚した。

は、それに先立つ、

b 智恵子はだれと結婚したの？

の答えであったとしよう。このとき、「光太郎と」のあとに少しの間がおかれたり、或いは「光太郎と」にプロミネンスがおかれたりして、(5)aのように発話されたとなると、「光太郎」と「智恵子」は「違った資格」になってしまい、「一つの構成要素」ではなくなってしまうことになる。もちろん(5)aは、寺村の言うように二つの名詞句が「一つの構成要素」とみなされるという解釈もあるだろう。すると(5)aにおいては、「平等の資格」か否かや、「一つの構成要素」か否かは、寺村のように助詞の形から接近するのは困難なものになってしまうことになる。

また次の例はどうか。

(6) ひろみがみなみと図書館でお菓子を食べた。

これは統語的な観点だけからでは、「みなみ」が「あい方格」であるということを積極的に示す理由もなければ、なぜ、「みなみ」と「図書館」とが「一つの構成要素」でないかも説明できない。

以上のように、寺村の「並列」についての説明は、統語上の観点からのみなされたものではなく、「(これが動作主)とか、「これとこれとで一つの構成要素」などの)寺村本人の名詞句「解釈」が先にあり、説明はそれを反映したものであると言える。

こうした傾向は、その後の「並列」についての研究にも引き継がれている。中俣(2009)は、

「と」で並列された要素を結びつけているのは、単にその要素が共通の述語から同じ格を付与されているという事実のみである。例えば「肉と魚を食べる」であれば「食べる」という述語が「食べるもの」という集合を規定し、「と」で並列されるのはその集合に含まれる要素である。

と述べている。寺村が「並列」の条件を助詞のあり方と文型に求めたところを、中俣は「共通の述語から同じ格を付与されている」として、統語上の観点から説明しているように見える。さらに、「文中の一つの構成要素」を保証することを、「集合」と「その要素」との関係という意味上の観点から述べているように見える。しかし、説明の根拠を具体的に提示することもなく「共通の述語から同じ格を付与されている」というのが無前提的に提案され、結局、寺村同様、それが何によって支えられているのかを明示しない。さらに、中俣は「集合を規定する」のは「述語」であるという説明をとっているが、この説明では、次のような例について説明できない。

(7)a 城島はホークスとタイガースのどちらかに入団するだろう。

b 北越谷と春日部の間にはいくつの駅がありますか。

c ばくへの遺産は、この屋敷と荒れ果てた土地だけだった。

「ホークス」と「タイガース」は「入団する」要素ではないし、「北越谷」と「春日部」は「ある」の要素ではないのである。また、cに見られるように「述語」自体に「並列」要素がある場合は説明ができなくなる。

また、次のような例についても問題が残る。

(8)a 出家とその弟子

b 当家の主人になられたグリーン＝フォン＝エッヘンバッハ三世と妹御のローズ嬢

(8)において、「出家」と「その弟子」は、さらに、「当家の主人になられたグリーン＝フォン＝エッヘンバッハ三世」と「妹御のローズ嬢」は、いずれも「並列」要素であると言われるだろう。しかし、

(9)a その弟子と出家

b 妹御のローズ嬢と当家の主人になられたグリーン＝フォン＝エッヘンバッハ三世

はいずれも許可されない。「並列」という用語法は、「AトB」ならば「BトA」ということを含意する。しかし、(8)と(9)の関係をみてみると、必ずしもそれが成立しないということがわかる。

ところで、上で見た「並列」と「並列助詞」とは、どのような関係にあるのであろうか。実は、寺村(1991)と中俣(2009)だけでなく、「並列」を記述するほとんどが、この「並列」された「要素」の「間」にある「何か」を、「並列助詞」と呼んできた<sup>3</sup>。しかし、実際は、どの説明も、「並列」は述語などの「並列助詞」以外の要素によって保証されていると指摘している<sup>4</sup>。

以上のように、従来トは、それぞれの名詞句が「並列である」という認定がおこなわれたとき、その「間」にある助詞として捕捉されている。そうした態度は、実は、トがandと近いものとして捉えられていることから発していることであろう。そうであるからこそ、「間」にはないト、即ち格助詞トとは、はなからパラレルに記述されてきたと言えよう。しかし、それでは(3)の例は扱いきれないし、(7)aはどちらかというトorに近いと言えるから別の説明が必要になるのではないだろうか。このように見えてくると、名詞句が「並列」されていると言われる現象は、文中に現れている名詞句が、文全体において「一つの構成要素とみなされる」ということを指しているということは確認できるのであるが、それが何によって成立しているのか、さらに、そのことにトがどのように貢献しているのかという点については、全く明確ではないということがわかった。以下、小論では、文中で複数の名詞句が「一つの構成要素とみなされる」ことを、「並列的解釈」と呼ぶことにする。

## 2 NPトという見方

あまりに当たり前の話であるが、トは助詞である。この当たり前のことが、実は「並列助詞」という記述がなされる場合失念されているとしか思えない。1で述べたこ

とであるが、これは多分にandとの親和性のもと、それが記述されているからに他ならない。andは助詞ではなく、ある語とある語との「間」に現れる独立した単語である。しかし、トは助詞である。日本語のルールでは、助詞は自立語に後接する。あまりに当たり前なこうしたことに着目するなら、(1)も(2)も(3)も、名詞句（以下「NP」）にトが付加しているという現象としては共通していると言えよう。こうした視座に立つことは、従来それぞれの名詞句を最初から「並列」要素と「格成分」とに分け、それぞれのトを「並列助詞」・「格助詞」としてパラレルに取り扱ってきたのとはちがった振り出しを導出する。つまり、小論では、「並列的解釈」を受ける箇所について、従来「NP1トNP2」と記述をしてきたところを、「NP1ト」と「NP2」を切り離し、記述をおこなう<sup>5</sup>。従来の記述では、「NPト」が現れる文については、「並列的解釈」とそれ以外の解釈があり、それぞれは「[NP1トNP2] ガP」と「NP1ガNP2トP」という構造の違いがあることが指摘されてきた。しかし、「並列的解釈」を「NP1ト」と「NP2」に分けるなら、その二つの解釈は同じ構造と言えることになる。

小論の態度が支持されるだろう三つの事例を提示する。

まずは次の2文を比べてみよう。

(10a) ひろみがみなみとご飯を食べた。

b ひろみがおかずとご飯を食べた。

この2文の構造上の違いは、統語情報によってのみなされるのではなく、実は意味情報に依存している。(10a)では「みなみ」と「ご飯」は「並列的解釈」を受けないが、(10b)では「おかず」と「ご飯」が「並列的解釈」を受ける可能性がある。同じく「食べた」という述語であるにも関わらず、(10a)は「NP1トNP2ヲP」で、(10b)は「[NP1トNP2]ヲP」とするのはなぜなのか。こうした構造記述は、「みなみ」と「ご飯」は「並列的解釈」を受けないが、「おかず」と「ご飯」は「並列的解釈」を受けるという、それぞれの名詞句の意味情報に立脚してのことであろう。つまり、「並列的解釈」を受けるかどうかは、こうした意味情報によるところが大きく、統語情報からのみでは「[NP1トNP2]ヲP」という構造であるとは言えないことになる。そのため、(10a)も(10b)も統語的には「NPト」として共通していると言えるであろう。

次に、

(11) ひろみとみなみとがけんかした。

のような「NP1トNP2ト」という形式の存在も小論の態度を支持する。この形式を記述する場合、従来の「NP1トNP2」という「並列」の構造記述では、「NP2」の後に現れるトについて説明できない。これは「NPト」という要素が「二つ並列している」として記述することで問題は解消されるだろう。

さらに、

(12a) ぼくは息子と二人で神宮球場に行った。

b ぼくは息子と一緒に神宮球場に行った。

の場合、「息子と」という要素は、従来の記述によれば、どのように説明できるのだろうか。「息子と二人」・「息子と一緒に」という「並列」構造ではないだろうし、か

といって、これを「格」として扱うと、「二人で」・「一緒に」の扱いに困ってしまう。これについても「NPト」として、その要素を独立させることで乗り越えられるだろう。

以上三つの事例から、小論で提案したように「並列的解釈」を受ける場合も、そうではない解釈を受ける場合も、統語的には「NPト」という構造として共通していると言えよう。

### 3 「対称関係」と「NPト」

定延(1993)は「対称関係」を「言表事態の中で同等の位置にある2つのモノの関係」と定義としている<sup>6</sup>。

(13a) ひろみとみなみが遊びに来た。

b みなみがひろみと遊びに来た。<sup>7</sup>

「対称関係」から見れば、(13a)と(13b)においては、「ひろみ」(で指示される対象)と「みなみ」(で指示される対象)は、言表事態において「遊びに来た」動作主であるという点では同じであり、言語表現上での二つのモノの提示の仕方も、一方が「NPガ」でもう一方が「NPト」であるという点は同じである。違う点はそれぞれの要素の現れる位置である<sup>8</sup>。もちろん、こうした「対称関係」は(13)のような「動作主」になるモノ同士だけでなく、

(14a) アイスとお菓子を買ってきて。

b 図書館と学食で寝ている。

c 高田駅と春日山駅へ行ってくれ。

d 山形と秋田から来た。

のように、いろいろな意味役割のところに観察される。

1で、

(15a) 出家とその弟子

b その弟子と出家

という例をあげ、aは許可されるがbは許可されないということを述べた。確かに、NP1とNP2の入れ替えという作業を言語表現上でおこなおうとすれば、上のような問題が起きてしまう。しかし、「対称関係」から考えれば、その二つは、その言語表現に反映させるときの「順番」に依存しているがゆえ、(15a)のような形をとっているとえよう。もし、「出家と」が「その弟子」の「後」に来るならば、その形に対応するように言語表現を整えるだけである。この「順番」で提示されているがゆえに、指示語が「後」の名詞句に現れているのである。「対称関係」に対応するように言語表現は整えられるのである。

また、次のことも同様の問題として記述できるだろう。

(16) 年をとった父と母が上京してきた。

(16)の「NPト」のNPは「年をとった父」なのか「父」なのか。これもやはり「対称関係」と言語表現の問題に還元すべきである。つまり、「対称関係」にあるモノが、もし「年をとった父」と「母」であるならば、

(17) 母が年をとった父と上京してきた。

という提示の仕方也可能だが、もし、「年をとった父」と「年をとった母」であるならば、

(18a) 年をとった母が年をとった父と上京してきた。

となると冗長さが感じられ、

b 年をとった母が父と上京してきた。

の方が座りがよい。(16)の「年をとった」は「対称関係」にあるモノとの対応で、もし(18)の読みならば、共通する修飾成分は一つに集約されていると考えればよい。なお、

(19) 若いお母さんと息子が歩いている。

の場合は、「若いお母さん」と「若い息子」という「対称関係」がありえないことによるもので、「若い」は「息子」にまで及ばない。ただし、これは意味情報が加味されたものである。

#### 4 「対称動詞」・「非対称動詞」と「NPト」

仁田(1974)は、「NPト」を「必須の成分」として要求する(20a)の「結婚する」のような動詞のタイプを「対称動詞」とし、(20b)の「NPト」が「共同行為者」として共起する「歩く」のような動詞のタイプを「非対称動詞」と呼んだ。

(20a) ひろみがみなみと結婚した。

b ひろみがみなみと歩いている。

(10a)の「ひろみがみなみとご飯を食べた」であると「みなみと」は「共同行為者」であるという記述をされることが多いが、「ひろみがおかずとご飯を食べた」になると「おかずと」は「ご飯を」との間に「並列的解釈」を受けることが多い。この違いは、「みなみ」と「おかず」の位置に現れる名詞句の意味情報によって決定されるのであって、「NPト」は「共同行為者」であるとは統語情報のみからは言えないことである。それに対して、(20b)の「みなみと」は「共同行為者」としての解釈を阻害する条件は何もない。しかし、この場合も「NPト」とみなすことで「ひろみが」と(現れる位置の違いがあるものの)「並列的解釈」を受ける可能性が生じる。こうなると、仁田の言う「非対称動詞」の場合も、「NPト」は他の要素との間に「並列的解釈」を受けることもあると言え、「並列的解釈」と「共同行為者」という解釈の間の差はなくなってしまうことになる。

それに対して「対称動詞」の場合はどうか。仁田は「対称動詞」の場合、「あい方格」を認定し、それを「必須の格成分」であるとしている。そのことは一見正しいように見えるが、「対称関係」を持ち込むと、

(21) みなみとひろみが結婚した。

と(20a)とは「同じ言表事態」を反映した文と言える。つまり、(20a)と(21)との違いは「みなみと」の位置の違いであって、従来のように、(20a)を「あい方格」と解釈し、(21)を「並列的解釈」として記述する必要はなくなるのである。ただし(21)は、「みなみ」と「ひろみ」が「夫婦になった」という事態に対応している場合と、「みなみ」が「もち

づき」と、「ひろみ」が「みな」と、それぞれ「結婚する」という事態に対応している場合とがある。それに対して(20a)は後者の事態とは対応しない。仁田のように「対称動詞」というレッテルを前もって動詞に貼ると(20)は許容されない文になってしまう。それは、それぞれの「結婚相手」が言語表現上明示されていないからである。こうしたことは「対称関係」のあり様の異なりであって<sup>9</sup>、後者のような「対称関係」の場合には(20a)は対応しただけの話である。それは(21)の場合

(22a) みなみとひろみがXト結婚した。

という文が本来的にはその事態に対応するものであって、

b Xトみなみとひろみが結婚した。

というように、その位置の変更を許可するのである。

以上から、「対称動詞」と「非対称動詞」の違いは、「NPト」の現れる位置に影響を与えないということがわかる。

## 5 「対称性」と「NPト」について

小論は「並列」・「共同行為者」・「あい方格」というそれぞれの解釈は、名詞句が指示する対象の「対称関係」に支えられ、統語的には「NPト」の現れる位置の差に根ざしたものであるということを指摘してきた。しかし、定延に限らず「対称関係」に言及している論考は、いずれも動詞にその概念を適用してきた。定延は「2つのモノが対称関係にある」と言語形式が規定する力の度合いを「対称性」と呼んでいる。「対称関係」が「2つのモノの関係」であるならば、「対称性」を持っているものは、動詞に限られない。

(23a) ひろみの家とみなみの家は遠い。

b ひろみの親とみなみの親は親しい。

c この三角形の面積とその三角形の面積は等しい。

これらは形容詞述語文である。形容詞には、「対称性」の高い語はあまり多くない。それは名詞句で指示される対象の「性質」を述べるのが形容詞の性質であることが多いからである。しかし、中には、(23)で挙げたように、NP1で指示される対象とNP2で指示される対象の「関係」を述べる形容詞がある<sup>10</sup>。こうした「対称性」を付与する形容詞の場合、

(24a) みなみの家はひろみの家と遠い。

b みなみの親はひろみの親と親しい。

c その三角形の面積はこの三角形の面積と等しい。

と「NPト」の位置の変更を許可する。

次の例は形容動詞述語文である。形容動詞も形容詞と同様、「対称性」を付与する語は少ないが、いくつかある。

(25a) この三角形の面積とその三角形の面積は同じだ。

b ひろみとみなみは無関係だ。

c ひろみとみなみはベタベタだ。

そして、これも形容詞同様、

(26a) その三角形の面積はこの三角形の面積と同じだ。

b みなみはひろみと無関係だ。

c みなみはひろみとベタベタだ。

と「NPト」の位置の変更を許可する。

次の例は名詞述語文である。名詞も形容詞・形容動詞と同様である。

(27a) ひろみとみなみは夫婦だ。

b オダギリジョーと次長課長の河本は同級生だ。

c 元ヤクルトの古田と大木凡人は親戚だ。

これらも、

(28a) みなみはひろみと夫婦だ。

b 次長課長の河本はオダギリジョーと同級生だ。

c 大木凡人は元ヤクルトの古田と親戚だ。

と「NPト」の位置の変更を許可する。

なお、語の場合には「対称性」がないか低い場合でも、述語全体で高くなることもある。

(29a) みなみがひろみと一緒に歩いている。

b ひろみはみなみと仲がいい。

c ひろみはみなみと同じくらい元気だ。

d ひろみはみなみと同じクラスだった。

これらは、

(30a) ひろみとみなみが一緒に歩いている。

b みなみとひろみは仲がいい。

c みなみとひろみは同じくらい元気だ。

d みなみとひろみは同じクラスだった。

というように「NPト」の位置の変更を許可する<sup>11</sup>。

以上のように、「対称性」を付与するのは動詞述語だけではない。

## 6 「NPト」とトの機能

もし言語表現において「対称関係」が成立しているなら、そのうちの一方の名詞句は言語表現上「NPト」という形で導入される。そして「NPト」は文中において現れる位置には、それなりの「自由度」がある。もし、「対称関係」にあるもう一方のモノに対応する名詞句の「前」に現れたなら「並列」の解釈を受け、「後」に現れたなら「共同行為者」か、あるいは「あい方格」という解釈を受ける。ただし、こうした「NPト」の解釈は、その統語的な構造を反映したことなく、意味情報を加味したものであって、「構造」というよりも「解釈」と言った方がいい。

以上がここまで小論が述べてきたことであるが、ここで「NPト」の統語的な特徴を述べておこう。



- (31) 「NPト」のNPは、別のNPとの「対称関係」を反映したもので、統語的にはその(別の)NPと同じ機能を担う。

しかしこの記述は、動詞述語文において、文中のすべての「NPト」に適用されるわけではない。

- (32a) アイスとお菓子を買ってきて。  
 b お菓子をアイスと買ってきて。  
 (33a) あのイヌはこの壁とあの電柱にマーキングをした。  
 b あのイヌはあの電柱にこの壁とマーキングをした。  
 (34a) 子どもはナイフとフォークで料理を食べるのが苦手だ。  
 b 子どもはフォークでナイフと料理を食べるのが苦手だ。

(32)から(34)のaはいずれも「NP1トNP2(ヲ・ニ・デ)」の「語順」である。この場合は全部適格であるが、bの「語順」になると不適格になる。しかし、

- (35a) みなみがひろみと図書館でしゃべっていた。  
 b みなみが図書館でひろみとしゃべっていた。

はどちらも許可される。つまり、動詞述語文において、「NPト」の位置に「自由度」が許されるのは、そのNPが指示するモノが「動作主」である場合に限られるのである。このことは次の例からも証明される。

- (36a) 1号館と2号館が建った。  
 b 2号館が1号館と建った。  
 (37a) リビングの電気と和室の電気がついている。  
 b 和室の電気がリビングの電気とついている。

(36)と(37)のaはいずれも適格であるが、bはいずれも不適格である。「1号館」と「2号館」、「リビングの電気」と「和室の電気」は、(36)と(37)の言表事態において「対称関係」にある。しかし、それをbのような位置に「NPト」として置くと不適格になる。これらはガ格であっても「動作主」ではないのである。

以上から、(31)の記述には次のような条件が付与される。

- (38) 言語表現上「NPト」の位置が「自由」であるのは、次の二つの場合に限られる。

(ア)「対称性」を付与する度合いが高い述語の場合。

(イ)「対称性」を付与する度合いがないか、もしくは低い述語の場合は、「NPト」が、言表事態において「動作主」である場合。

ただし、(38)は、「語順」の「自由度」がきかない場合についても、次のようにあわせて記述しておかなければならない。

- (39) 「NPト」のNPで指示されるモノが「動作主」でないとき、その「NPト」は、言語表現上、直後に現れる「NP+助詞」と同じ機能を担う。

以上のことは「NP1+ノ+NP2」の連体修飾の場合にも適用される。

- (40a) すべての生体分子は常に合成と分解の流れの中にある。  
 b すべての生体分子は常に分解の合成と流れの中にある。

NP1とNP2は、aでは「合成」と「分解」だが、bでは「分解の合成」と「流れ」にな

っている。小論では、このことについても「[NP1トNP2]ノ」とは考えない。これはaでは「合成と」が統語上「分解の」と「同じ機能を担う」のであるし、bでは「分解の合成と」が「流れの」と「同じ機能を担う」からであるとする。

小論が以上のように考えるのは、「動作主」において二つのモノが「対称関係」にあるとき、「[NP1トNP2]ガP」と「NP1ガNP2トP」という二つの構造を記述しなければならないことの無理矢理さを解消するためであるとともに、トが助詞であり、他のNPにも助詞が後接するという、日本語の統語ルールに立脚したことからの帰結のためである。

なお、次の例も参照されたい。

- (41)a ひろみとみなみはいい学生だ
- b みなみはひろみといい学生だ。
- (42)a ひろみとみなみはやさしい。
- b みなみはひろみとやさしい。
- (43)a ひろみとみなみは元気だ。
- b みなみはひろみと元気だ。

(41)から(43)までのaはいずれも適格であるが、bは不適格である。これは名詞述語文・形容詞述語文・形容動詞述語文の統語的な特徴に負うところが大きい。これらの文は「XハY」という構造を持つ有題文で、YによってXの性質を述べるものである。(41)から(43)のbの例は、構造的に「Xハ」の「外」に「対称関係」を反映させた「NPト」が出てしまうことで、言語表現上、「対称関係」を反映していないことになってしまうからである。

「NPト」の統語的な特徴が(31)・(38)・(39)のように記述できたとき、では、助詞のトは、それにどのように関わっていると記述できるのか。

- (44) トは、それが付加する名詞句を、それと「対称関係」にある（本来的には）後続する名詞句と、文中において同じ役割を担うよう機能させる。

従来のトについての記述は「並列させる」とか「結合子である」とかあるいは「格を表す」とかアドホックに記述されてきたし、「共同行為者」に至っては、トの役割が何であるのかさえ示されてこなかった。小論の(44)の記述は、それとは大きく異なり、トについての統一的な記述になっているのではないだろうか。

#### おわりに

小論の振り出しは、寺村による「並列」の説明からであった。そこで「平等の資格」という説明がなされていて、そのことについて説明の不透明を指摘した。小論が記述したのは、寺村の説明とそれほど距離がないように思われるかもしれない。しかし、それは大きく異なる。小論が「平等の資格」と考えるのは、言語表現上のことではなく、あくまで「対称関係」というモノの世界での出来事である。寺村たちが「平等の資格」を「与える」という作業になったとき、口ごもらざるを得なくなるのは、言語表現上でことを済ませようとしたためと、統語上の問題に意味情報を持ち込んだため

であって、そこには結論は見つからないだろう。小論では、「対称関係」というモノの世界に踏み込むことで、「NPト」で導入される統語上のルールについて記述でき、さらにトの機能にまで言及できたと思う。

(注)

- 1 「あい方格」という呼び方は、仁田（1974）による。他者は同様の格について、「共格」・「随伴格」などと呼んでいるが、小論では「あい方格」を採用する。なお仁田は「ひろみがみなみと歩いている」の「みなみ」は「共同行為者」として、「格成分」として扱っていない。こうした要素の扱いは、研究者によってかなりのバラエティがある。
  - 2 寺村よりも以前から、(1)のような例については、「並列」であるという指摘がなされている。また、「平等の資格」は「同等の資格」や「共通の資格」という言い方で説明されてきた。しかし、それぞれに共通しているのは、以下で扱う寺村の説明と同様、その定義がきわめて曖昧であるという点で共通している。
  - 3 寺村（1991）のように「並列助詞」という呼び名のもと、「並列」と見なされた名詞句の「間」にある要素を拾い上げる作業を続ければ、
    - ・ 人命尊重と早期解決、情報収集と情報操作、矛盾するものを足して二で割ってくれ。（『大問題'08』いしいひさいち・峯正澄 創元ライブラリ 167p）の場合、「並列」されているのが何であるのかは、「並列助詞」という観点からだけでは記述できないことになってしまう。また、並列助詞に「、」などを入れていることもしばしば見かけるが、こうした姿勢は、書記言語という限定的な中での記述になっていることを表していよう。もし、
      - ・ 旧社会党系の社会民主主義、小沢氏に代表される地域重視の保守主義、鳩山由起夫氏の「友愛」に象徴される道徳主義的な自由主義が連合し、小泉自民党的な新自由主義へのアンチテーゼとして機能するようになった。（朝日新聞2009/9/9朝刊）
- が、音声言語として発話されたとしたら、傍線部の「、」で示されている箇所は、音声言語上の外形を何も持たない。
- 4 中俣が「『と』で並列された要素を結びつけているのは」としているが、トは並列には直接関わっていないことを中俣自身も認めているのに、こういう説明をするのは理解に苦しむ。
  - 5 日本語文法記述にとって少なからず恥ずかしいことであるが、こうした現象について、学校文法ではNPトという記述がおこなわれているのである。学校文法はご存知のように「文の成分」として「文節」を指摘していることが多く、そうした観点からでは「NPト」と扱わざるを得ないのである。
  - 6 「対称関係」という観点からの記述は、過去、いくつか示唆的なものがあるが、その中で定延（1993）が圧倒的に緻密であり、小論ではそれを参考にした。

- 7 こうした「比較」をするときに、従来「ひろみがみなみと遊びに来た。」という例文をさしだして、その違いを説明している場合が多いが、これはトが後接している名詞句がaとbとは違っている。小論のように「NPト」という要素として考えるならば、(13a)は(13b)と比較されるべきである。
- 8 定延は、表現のために用いられる、「XがYトP」と「[XトY] がP」という文型の差であると言う。しかし、小論では、これを文型の差であるとは考えない。その理由は、定延は、その文型の構造を「[XトY] がP」とするものの、そうであることの説明が明かでないためである。
- 9 定延は「対称関係」には、次の四つがあることを指摘している。
- a 馬場と猪木が250キロだ。
  - b 馬場と猪木が戦う。
  - c 馬場と猪木が（ブッチャー・シーク組と）戦う。
  - d (「今年の上半期にブッチャーと戦うのはだれ?」という質問に対して) 馬場と猪木が（ブッチャーと）戦う。
- aは、「250キロなのは、馬場でも猪木でもなく、馬場と猪木からなる組織体である」として、これを「組織内対称関係」と呼んでいる。bは「馬場の動作は猪木無しには成立せず、猪木の動作も馬場無しでは成立しないが、馬場と猪木は一つの組織体ではない」として、これを「相互的対称関係」と呼んでいる。cは、「馬場の動作も猪木の動作も、馬場、猪木なしでも成立する」として、これを「並行的対称関係」と呼んでいる。dは、「馬場が直接構成する事態に猪木は関わらず、猪木が直接構成する事態に馬場は関わらない。2つの事態がより大きな事態に統合されて初めて馬場と猪木は結びつく」として、これを「独立的対称関係」と呼んでいる。なお、以上の「対称関係」は「結びつきの強弱」があるとされ、 $a > b > c > d$ という順で、左ほど、結びつきは強いとされている。
- 10 高橋(1998)は、形容詞も格を支配することがあると、「近い」「親しい」「軽い」などを例として添えて、述べている。しかし、形容詞の場合を格と呼ぶのは、適切であるとは思えないし、仮にあるとしても、そうした「格支配」は限定的で、形容詞全般にまで広げられるものではない。
- 11 定延は(29a)と(30a)に現れる「一緒に」は、「ト一緒に」と記述している。しかし小論ではトは「一緒に」と接続するのではなく、助詞であるために名詞句に付加すると考える。その理由は、
- a クリックはワトソンと一緒に（ともに）二重らせん構造を解明した。
  - b ワトソンとクリックは一緒に（ともに）二重らせん構造を解明した。
- というようにNPトの位置変更があっても、それと一緒に「一緒に」や「ともに」は移動しないからである。

## (引用文献)

- 定延利之 (1993) 「深層格が反映すべき意味の確定にむけて」『日本語の格をめぐって』仁田義雄編 くろしお出版
- 高橋太郎 (1998) 「動詞から見た形容詞」『月刊言語』27巻3号
- 寺村秀夫 (1991) 『日本語のシンタクスと意味 Ⅲ』くろしお出版
- 中俣尚己 (2009) 「名詞句並列マーカーの体系的分析 —「と」・「や」・「も」の差異に着目して—」『日本語の研究』Vol.5, No.1 日本語学会
- 仁田義雄 (1974) 「対称動詞と半対称動詞と非対称動詞—格成分形成規則のために—」『国語学研究』13 東北大学文学部「国語学研究」刊行会

附記：数年前、上越教育大学国語教育学会の例会で、「助詞トについて」という発表をおこなった。まだ自分の中では「アイデア」に近いものであったが、発表後の懇親会の場で、渡辺英治先生が「おもしろい」とおっしゃってくださいました。そのころ、まだまだ研究対象も研究スタイルも模索の状態にあったのだが、渡辺先生の一言で、これで行ってみようと思ひし数年にわたって助詞のトと格闘できた。7月の学会報にある高本氏の文章を読んだ後、渡辺先生から「お前、並列のトはやらないのか？」と言われた気がして、しばらく「浮気」を繰り返していたことを猛省した次第。今ある自分を形成してくださった大きな存在のひとりであったこと、失ってはじめて認識する始末です。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

(文教大学教授)